

但馬・出石 土地の持つ価値を掘り起こし観光のまち創生

町民パワー全開

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

1. 独自の道を歩むまち 山間の小盆地、陸の孤島が一体感を養い、地域力を育む

出石のまちは、兵庫県北部、豊岡市にある、出石川中流域の小盆地で、河川と山に囲まれ基盤の目に町割りされており、江戸中期に信州上田から移ってきた仙石氏の下で繁栄をみた。

出石は、「古事記」「日本書紀」にも登場する古い町であるが、明治期に、近代化のシンボル・鉄道の敷設を嫌ったため**陸の孤島**と化し、産業経済の発展ということでは取り残されてしまった。しかし、山間に開けた城下町として、出石らしさを維持するには好都合であった。

町の中心には、高さ 16m の時計台「**辰鼓楼** (江戸期は太鼓を叩いて時を告げた。)」がランドマークとして時を刻むほか、出石城の面影が漂う隅櫓や家老屋敷、そして沢庵和尚ゆかりの宗鏡寺なども残る。これに出格子の町屋が軒を連ねる町並み風情は、旅人を懐かしい気分浸らせてくれる。この町並み今日、重要伝統的建造物群保存地区に指定され「**但馬の小京都**」と呼ばれており、この癒され心が和む町並み風景の中で味わう、出石焼の皿に盛られたユニークな**出石そば**は、他の地のものとはその作法からして一味違い独特で、観光客には大人気である。

出石の年間観光入込客数は約 100 万人、今や人口 1 万人強のこの町に、毎日 3000 人を超える人々が訪れていることになる。しかし、ここにくるまでには大変な苦労があった。それでは、この地の人々の知恵と金と労務とを結集した、類い希な観光まちづくりの軌跡を紹介しよう。



出石のまちの位置



まちのランドマーク辰鼓楼



町の人の手による町並み修復

2. 観光まちづくりの展開 観光協会 (NPO) が先導

(1) まちづくりの軌跡 意思強く持続する住民パワー

いまでこそ世間は、出石を観光まちづくりの成功例ともてはやすが、日本中が経済の高度成長

「地方創生」支援プロジェクト



に酔い、JRの前身・国鉄が「ディスカバージャパン」と銘打って、日本再発見の旅を売り出した1970年、鉄道が一本も走っていない田舎まちの**観光協会**（1962年設立）では、万博で賑わう世の中を尻目に、**将来の生きる道は「観光」**だとして、この地に埋もれかけた地域資源を掘り起こし、必死に観光まちづくりの道を模索していた、そうした長い雌伏の時がこのまちにはある。

○隅櫓の復元 城下町のDNA

出石では、自動車の時代を迎えた1960年代、城崎温泉や天橋立の観光ついでに、この地に立ち寄ってもらおうと、そのきっかけづくりとして、まず、地元観光協会が先頭に立ち、町民の寄付により建設費用2300万円のほとんどを調達し、出石城の隅櫓の復元（1968年）に手を染める。また、国鉄にも働きかけ、バス便しかない出石の地を周遊地に指定（1977年）してもらおう。さらに、観光協会は1970年頃、旧藩時代に仙石氏が信州から持ち込んだ「皿そば」に着目し、まち起こしにかかる。そうして町民の間に観光まちづくりの機運が出てくると、全町民11,000人の内**400人から会費を得て、観光協会を住民主体に運営**される組織へと衣替えする。

○皿そば*の復活 生活文化の産業化、オリジナル

そうして地道な努力を重ねていくと、当初わずか3軒しかなかったそば屋が次第に増え、その味を競うまでに育っていった。そうなるに評判が評判を呼んで、出石そばを目当てに観光客が大勢押し寄せるようになった。この出石そば、現在のスタイルが確立されたのは昭和30年代（1955年～1964年）である。現在50ほどある店舗のうち10軒ほどは、この地のかつての花型産業だった繊維（但馬ちりめん）産業からの転業である。

※皿そばは、通常1人前5皿が供される。そばは地物として各店のオリジナルな絵付けがなされた、出石焼の白い小皿に盛られる。各店の皿を見るのも、そばを食する楽しみの一つである。1皿分のそばの量はほんの2口3口程度、物足りない人には1皿単位で追加注文できる店が多い。そばは実を丸引きし色は茶褐色、徳利に入ったダシと薬味の刻みネギ・おろし大根・おろしワサビ・トコロ・生鶏卵1個が出される。そば猪口にダシと薬味を好みに応じトッピング、そばを浸して食べる。そばの製法も、江戸期に確立された「挽きたて」「打ちたて」「茹でたて」の”三たて”がある。これらを食べ分け多彩な味を楽しむことを信条としており、これが現代人の遊び心とあい出石そばは人気者となった。



出石の観光資源マップ



隅櫓



出石皿そば

「地方創生」支援プロジェクト



○伝統的町並みの修復 癒される、和む

しかし、そばを食べて「ハイ、サヨナラ」ではレストハウスと同じ。観光協会は食後に土産物探しなどで、町歩きを楽しんでもらおうと、町並みの整備を考える。しかし、当時の出石は鄙びた田舎町で、その町並みは、アンノン族も避けて通る3K状態（旧式で古く、汚く、崩れかけていた）であった。その頃（1983年）、地元の政治家、斉藤隆夫の記念館・**静思堂**が完成、この場を活用し静思塾（塾長は草柳大蔵）の講演が開かれた。講師には静思堂を設計した建築家の**宮脇檀**が招かれた。宮脇は講演の中で「出石は、このままではダメになる。観光だけでなく**出石そのものの魅力に目を向けよ**」と、この地固有な価値に着目したまちづくりを町民に呼びかけた。

これをうけ関係者が動き、観光の舞台として出石らしい町並みの形成に向け歩み始める。宮脇の呼びかけから5年経った1988年、行政・専門家・町民を交え「**城下町出石を活かす会**」が立ち上がる。ここには大工や左官など職人達も参画、**会員は200人ほど**に膨れ上がった。彼らは行政に頼らず自ら**会費を出しあい、町並みゼミを開催**するなどして会の運営を図るとともに、自ら**労務を提供し町並の修復整備**に取り組む。

行政も、県から都市景観形成地区の指定（1986年）を受けると、翌年には**ガイドライン**を、また1991年には**町屋デザイン・マニュアル**を作成、これに**助成措置**をリンクさせ誘導・支援に入る。また、町自らも1993～2003年の間、**街並み環境整備事業**を施行、水路や電線の地中化、道路の美装化などを進めていった。さらに行政は、そう多くはない**税収を無駄にしないよう、公共建築物の建築**などにあたって、宮脇檀（1983～2008年、町役場、出石中学校、伊藤美術館など）やいるか設計集団（1991年、弘道小学校）など、**出石らしさを体現できる建築家を起用**、観光まちづくりの趣旨に沿って建築デザインを誘導していった。

そうした皆の努力の積み重ねが評価され、この地は2007年に**重要伝統的建造物群保存地区**（約23.1ha）の指定をうける。これまでに**要した時間は20年**である。これは半端ではない。おぎやーと生まれた子供が成人に達するまでの時間に相当する。この地の町人の心意気と持続的な努力には感服する。

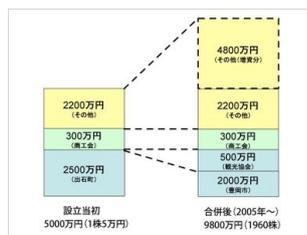
この地のまちづくりは地味だけど凄い、何が凄いのかというと一にも二にも**町民パワー**である。出石では、「誰も助けてくれない、自分たちでやっていかなくては」と、わずか一万人強の町民が、個人や企業また行政の別を問わず、皆で**知恵でも資金でも労力でも**出せるものは全て出合っ、**協働でまちづくり**を進めてきている。その**活動力**は特筆すべきものがある。



静思堂



弘道小学校



まちづくり公社の株主構成



永楽館

「地方創生」支援プロジェクト



(2)まちづくりの推進体制 観光協会からまちづくり公社へ

それでは出石のまちづくりの推進体制を紹介しよう。出石では、町民を主体に**観光協会**が立ち上がり、これが知恵袋となり隅櫓の建設や観光ガイド、そば店の経営などを進めてきた。しかし、この観光協会は任意団体なので資産を所有できず、その活動が制約されていた。そこでまちづくりの幅広い展開を考え、1998年に観光協会のまちづくり事業を発展させ、**第3セクター・(株)出石まちづくり公社**を設立した。

公社の資本金5,000万円は、公民が半分ずつ出しあった。民の側の**株主は地元の主婦や寺の住職など168名**、その後、豊岡市との市町村合併に際し、出石町民を対象に一人一株に制限し増資(一株5万円)を募ったところ、**株主住民は334人に増加**した。この時、市の出資割合は20%に引き下げられた。公社の資本金は今日、当初の2倍の約1億円に達している。

この地ではまちづくりにおけるコンセンサス形成は商工会、公共空間の整備は豊岡市、具体的な事業展開は出石まちづくり公社と分担している。1999年にはTMO構想の認定をうけ、公社は、現在、集合貸店舗の建設、空き地・空き店舗の有効活用、交流施設や観光PR施設また駐車場などの経営を手掛けており、近年は年3%の配当を出すまでになっている。

3. 土地の固有性こそが、まちづくりの出発点 出石らしさの表現、復元・復活・修復

これまで経済効率優先で突っ走ってきた近代日本も、成熟期に入り「効率から満足へ」と人々の価値観が方向を変えてきている。出石のまちは明治期に近代化を忌避したこともあり、100年以上もの長きにわたり置いてきぼりをくってしまった。しかし、日本が近代化目標を達成すると、世間の空気も変わり伝統への回帰の動きがみられるようになった。

そうすると、かつて日本のどこにでも見られたが、今では残り少なくなってしまった癒しの雰囲気や和みの風情を醸す、出石のようなまちが貴重な存在となってきた。出石では、近代化を遠ざけた昔から、この「癒し」や「和み」を地域価値として大切にしてきた。経済の高度成長期、3Kのまちとして見放された出石も、時の経過とともにVAN・JUN世代のオジサンとオバサンが、大挙して皿そば食べにやってくるようになった。彼らは町歩きしては「癒されるー」「和むー」といって、心のリフレッシュを楽しんでいる。

最近、昭和初期に建築された木造瓦葺きの町屋を転用し、旅籠・西田屋としての活用が始まった。また、時代にあわせ文化的なまちづくりということで、明治34年建築の芝居小屋・**永楽館**を改修し、歌舞伎や新劇、寄席などの舞台に供している。このように出石のまちは近代化の荒波をかいくぐり、**復元(隅櫓)・復活(皿そば)・修復(町並み)**をキーワードに、この地のもつ**固有な価値**にこだわり、これに**磨き**をかけている。昨今このことが多くの人々に支持され、今

「地方創生」支援プロジェクト



や一周遅れでまちづくりのトップランナーの位置に躍り出たかのようである。

参考文献等

愛知淑徳大学谷沢明研究室 (2001) : 「出石・歴史的風土を活かしたまちづくり」

古田清久(2002):まちづくり情報サイト・街元気「出石の観光まちづくり」 <https://www.machigenki.jp/153/k-1508>

豊岡市ホームページ:「城下町出石の街並み保存」、「伝統的街や建築の意匠構成の手引」

出石まちづくり公社ホームページ:「そばを味わう城下町」

NPO法人但馬国出石観光協会ホームページ:「重要伝統的建造物群保存地区」、「出石皿そば」

掲載写真等

出石のまちの位置 <https://www.machigenki.jp/content/view/712/350>

町の人の手による町並み修復 <http://itutemiru.asablo.jp>

出石の観光資源マップ <http://www.izushi-tmo.com>

隅櫓 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

出石皿そば <https://www.machigenki.jp>

静思堂 <http://www.tajima.or.jp>

弘道小学校 <https://www2.aasa.ac.jp>

まちづくり公社の株主構成 <https://www.machigenki.jp>

永楽館 <http://www.izushi-tmo.com>

「地方創生」支援プロジェクト

